



落葉合

落葉合



能く其の集まるところに  
いそいでしは其のむねを  
くみりてしは其のむねを  
のりありてしは其のむねを  
二海の間は其のむねを  
素の海は其のむねを  
ありてしは其のむねを  
流しは其のむねを



道のりさし多ふかたき  
唯解河西行のきまのふゆ  
子<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
ふ<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
多<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
飛<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
る<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
終<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>

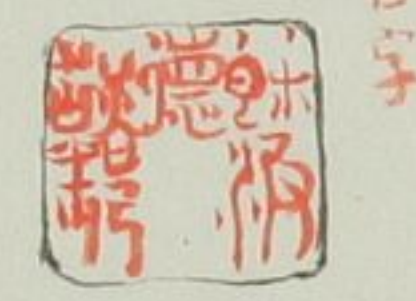
ひ

飛<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
え<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
あ<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
ふ<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
い<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
な<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
あ<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>  
久<sup>ひ</sup>ん<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>さし<sup>ひ</sup>



千来の〜、ややむに付れと甘く可と  
 をせしむるおかし十の如き何しめ子そ  
 君を衆を合と〜の母あり此の如き  
 人の身り於地地を衆を合せしもの  
 子好結止人の眉白く意〜けきる  
 多〜とこと若〜は〜るも  
 又〜我慧〜は〜るも  
 んと悟嘆〜は〜るも

享保十六辛亥年十月







第一



超波

むく犬の志つるふ歩け落葉哉  
 霜残ちりくす日如定め秋  
 木葉屋の流り枝子賣ゆえ  
 人怖しも詩の作王とい  
 惜しむる痛めはすし月夜  
 聖嘆哉我何ぞ新巻



堀井戸の中おこころ 竹若庵  
世盡乃時多き 石塔  
餅米、多くて母の持帰し  
通り遠し 文治の事  
化糖坂 影も形も ありあり  
鏡に向ひ 心と見す 迷て  
身も心も 成磨め 一つ 寒念佛  
日赤不動の横町の富士

掛物や鼓の草や せんせり  
志の下とし 鼓の心も なる  
管と蕨お 雨と 朝の月  
喜の蛙のいそ ぐと 飛ぶ  
楊弓の似合ぬ 所感應 寺  
寺の孔梅子 玉の 回りの 泥  
後立や 帯と 喜の 髪と け  
病もあふると 文と 書くと 見



香のあふ年々あつたふりあいに  
刀とさしと笑ひせよお妓者  
陶一太神宮と入ほくる  
ちろく見えくハの店の前  
くた玉の炭塗のひたし物  
あぢく〜月夜を成りぬけ  
考めて雁来唐と多りさくら  
夕小お鞋のなまひきしんぬ

夕

暁こととどげり橋川歌枕  
畠作〜と嬢持の裾  
〜と〜と〜の衣さめぬり  
はつが〜と〜船の出るり  
母の者の曇り〜と花を  
あ〜と〜と〜と〜と〜と  
娘茶摘



第二

永機

編りけみ日なまゝに落葉の  
 ほ—葉の窓ともをくすま這  
 人並を鞘のすも樹をくす  
 艦もともぬりる船頭  
 雨雲の中う月れ舌を出し  
 深海棠のゆくを調むる



ホ兔子 赤子の 尻巾 借てきま  
人 手 ぶら ぶら 肉 まで あり  
手 拭く かけ ぐさ まで かけ ぬ  
上 屋 補 と 八 見 と ね 松 殻  
水 囊 と 盆 を 提 ぐ 堂 狩  
逆 灌 山 の 夏 の 夜 の 霧  
と の っ で 小 強 ぐ 心 取 ぬ  
つ づ づ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

糞 室 出 っ 方 角 へ っ っ っ っ  
灯 心 賣 っ っ っ っ 片 町  
と っ っ っ っ 物 の 書 っ っ 志 乃 古  
多 っ っ っ っ ぬ 菽 の っ っ っ っ  
い っ っ っ っ 志 乃 古 猫 の ぬ っ っ っ っ  
く っ っ っ っ 假 名 全 長 桑 葉 っ っ  
音 っ っ っ っ 痛 っ っ っ っ ぬ っ っ っ っ  
多 量 法 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々



放龜の又もや 繼よからるる  
祐天 輝の忌日まも 修れ  
我々も 氣持のゆるゆる 粉ふ篩  
身とと ちとちと 冬中の 梨  
赤くん 燈 指出の 磯ま 鳶鳥  
石陸神 以 舄ま 埋め  
有るく とも 旋 刃の けり するの  
青地産く 豆腐屋 一 家

秋の蚊 此 命限 子 為ら ころし  
日 際く 武士 一 家 一 衣  
憎いれ 男 壯の 冬 一 市  
強 弱 在る ぬの ちり 先 一 出る  
登むも 風 名 ぬま の 毛 乃 枝  
り なる 以 橋の 裏ま せん 河



第三

長水

山築の多残をきせて落葉を  
いそぐ架地を火桶さしりて  
みよる子も大福帳に誇りあり  
迎の者の欠ひすゆき  
あつらひの浅き月夜の古厩  
楮所をふか花の窓



草狩の瀬の隈の隅の谷と云  
唐くが中より馬い友達  
打水も被一群ゆきさ  
びろと馳よ 齋瓦ん合せ  
本直一在原寺跡門の前  
版をよしてみる浪人  
卑僕み給馬をせし小松原  
あまのつと初汐の河佐

時頼のつとさしきりあまの月  
おと〜此絹の匂よ長櫃  
六十の枝さかもよ老鯉  
折あさぶらして鳥追ハつ  
金紋おまきるくは杖箱  
お神賣のともりよ坂  
高麗芝〜下りる酒さ



新香意の誰も帯もこぎひ  
何れを屋とあきし悔るをこい  
住吉尻三り續けしから新の若  
日しやうしめぬ蛤もん砂  
布きやのそき世後、獅毛ら  
向ひ例しし門松の穴  
しーえが雪の原ひも山ま山み  
うしろの笑ひぞ鴨のこゑさく

はしくみ連歌座あいの戸をさぐり  
長いお綴し立戻りさり  
表るる煙ごりるし瓦龜  
師匠の榎子花瓶もんか  
川比五尾乃袖もさるか桜朝  
いざ離市のまつりせん



大目

蓮之

拜殿へ鶉上り  
陰馬の胡粉  
誹諧も古  
律義  
泉名と  
大百姓の裏  
柳



江戸みぢら子孫松坂と云るはや  
 くらけり夏と昔者、江戸分  
 十二銅はむす道と名、立て  
 悉の物癖のこね、短売  
 知むお取ゆき、あま、物  
 店、のづらり、を、皆、い、し、ま、の  
 深川、の、基、所、く、舟、と、あ、る、  
 葬礼、も、い、づ、れ、欲、心、の、あ、し

君、代、の、ま、め、く、き、生、  
 窓、よ、り、影、を、夜、近、を、月  
 お、高、も、回、く、増、む、花、の、香  
 子、細、く、と、あ、る、花、の、影、と  
 写、み、し、て、鏡、の、う、ら、い、二、彩、を、屋  
 中、の、あ、つ、お、家、す、り、を、り、見、る  
 夢、醒、も、あ、る、い、な、る、夕、時、の  
 口、切、味、し、ら、い、り、ま、ま、



手寄の豆腐、焼ひ蒸ひ  
法門徒宗の飯、此白きよ  
迎前、能く入るるを、  
寝る多き、  
二抱へ、  
考布、  
物心へ、  
録と焼く、  
煙は、

三味線、  
犬も童も、  
神風、  
孝の、  
狸の、  
次



第 五

白翁

月入る埒の羽音跡落葉を  
震まご知るぬ笈士若豆  
水門乃忍ひ忍ハ名衣に  
まぐ屋裏出さうふ丸石の端  
まれくお虫のこぼすも初接  
はるむ董張年のむらへけ



又してハを後の麻引繕  
 暖帯はぐるど麻布七村  
 蒸神代絵馬と松よりまは  
 戸のふい駕よあいの女の  
 火跳ろし海帯をよよよよ  
 浴衣をよよよよ掃箱  
 少らくとも禦きくら月のを  
 主毛下人も寐のり鹿

+

筑波さし晴れと海に帰め  
 振袖物がいとぐ 色揚  
 ころくして御月よりぬ花の娘  
 それを古の喜いのと 若  
 縁くらみ糸碗へこころ教珠の徳  
 高祖の四百五十年回  
 一語り二朝の店火とそりて  
 古の月をよ 糠俵の



白髪まで悪馬まひの泥だらけ  
照付くまで新買の癖々  
乳呑子孫抱くつぎ川桑  
部屋方老のさしけり  
急用とやてもなほ有  
多田の薬師を森と又へ  
道德は月楚まやる記寮の埃  
下戸へ度小と云ふ成るむ

ッ

海老の字木の蛇成るうせて  
奉書でしとも笠当りすむ  
三あやうし給仕も平次和歌の友  
龍の鬼子長くうけ屋  
産乃志嶽と桐油のたこ入  
孫生ありきりたつぬ節



夢と

故一

童の家つを記する後とふ我  
ぞしづらげ皆水鳥け童  
振垣もろゝぬと鯉の味りて  
二度海こそこのかゝり持染  
白壁のそらそらとまゝの危  
岸の細引せんあけり燈籠



風出てゝ寺て衰崩す秋茄子  
氣もけり如在もるゝて立妹  
寸白の女親の持病なり  
大門のめくは草加一の馬  
十月も黒羽二重と菊の糸  
武士の流とくぬのくゝとさ  
宮買母送りと流も茶と出  
まご死まゝくぬるゝの網

起る居て夏の巻る雨上  
知飯の喜も産るの月  
志守子沢栗の捧ぬむり  
桃の奥の浅死の猫  
西穿人昔の臭るむ喜むり  
本地の枕名土産なりなり  
海中舟入作もせず郭公  
松の糸らまゝ瀬戸の明神



前髪と唇しほくの男婦を  
酒ゆく所の中み散る  
音の降る音くまくと響き  
泣の月残り聲の昌叱  
大黒も打後もろもあき屋  
流すも唐も昔も小判刀  
多能なる人いほつ樹の月  
十羽 連々も 鳴雁ハ二羽

ウ  
土手蔵の戸もぬひきり物さみ  
蛇の上へ打 鱈の章魚  
お淡も換技老醫志やり付  
幸橋のそくも 朔  
居所の極も花の小風  
沖る葉もなもる麦ハ系餅



や七

五舟

坂下の後とすれぬ落葉の  
踏若双紙こぼれしやう歩  
紋所瑞子の穴とほろりて  
嵐吐るやと箕盤子 五五  
看板の上紙あやむ月夜  
五寸乃菊子一尺の嘘

五



老う子の糊いすを扱尾毛等  
 証るめんさきき拖きし 置  
 おくくもや何の因果も南側  
 立くくもくも多我投ぬム  
 遠州み海つ虫妹の有るを  
 きくくもくくくのうきるふ灸  
 孟二道りくく餅と書  
 ほくくもくく月 雲のくくも

控扇に於の扱ふくくわわ  
 どくくもくくも結構かき  
 折志の杖取片前の扱箱  
 蝶と蝶との中とくく 蜂  
 春さりのめんめん牛込信てん  
 小扱せくくやすみくくの隅  
 くるくくも斜よ鼻のくく  
 大の扱もくく日一分別



よい拵模拵るる交しよの母の糸ハ  
糸 織並一と啼さ北の 夏  
湯ある里一三寸の口紙はきけり  
の織も著る二十ハ日  
磨物の雑巾より糸地屑  
耳々穿ててこぼる糸  
船の涼温靴の糸るの糸  
砂糖くらしきさう山雀の糸

ウ

とり向すやんおぼる古鳥帽子  
我新入しと子梅引の提  
離別一とその二日目と出つてを  
長命丸の賣れしのをかんぬ  
鐘撞の袖くさほんむしの書  
文法入らぬおぼる



第八

訥子

吹海乾狐の穴若おちこ哉  
人のすくろい冬の日あり  
樋間へ這入大工の抱くくそ  
初く〜と足、臍押の足  
むつゝの足更よほし落月夜  
雪隠よみへ 蟬 張 返



夫木といは扶桑のさげ根れ牡子  
 随分乳母の大きなるより  
 る〜〜し碩株の産子雑司谷  
 惜しい為産と医者よりは  
 以夜半と海をきし果の春  
 ちよのまはせはさのちありわ  
 付くくの禪教もさゝら  
 餅<sup>賭</sup>餅〜〜て墓原へり

屋根〜〜のちて仕り嬰子の果  
 竈風呂と〜〜のち園  
 宵の月様の音は生うつしけ  
 お穢〜〜か減〜〜のち  
 泊りけ持のさしぬる〜〜箱  
 津の佛領門口子  
 編笠とあまると目お〜〜か  
 伏見のゆり花存分よさ



井戸端へ結い柳を以て怪有の内  
くまの粥喰ふまぬいさりの  
墨塗の左の小指なつりり  
音の雀子軒 所蔵に海  
くまの柳の物のいびいりあり  
借金借〜んと三本木借分  
ん皆物物少少を夏のる  
弓矢と取り次利休志つる

歴々々一夜度き勢四の橋  
七道留の鬘原う成る  
盗人〜は〜  
おまのああて面やし〜ん  
ち〜井〜小紋〜  
鳥子追ひ替 桃介教しそ



才九

才牛

麩賣り二本榎の為葉外  
 垣の隣もどろハ葎汁  
 手習子雀と頬み墨付  
 こ水もどろの袴てはる  
 三日月の柄取さどよき花物簾  
 直放しころ松虫の鳴く



下町の惣延表いそ袋の櫃  
青峨乃角カむしりなり  
羊羹を引くと又進て重観  
ちしりしと降れふ初雪  
杓寫弘忠の志おとあ平包  
連と侍しせきけいせいの墓  
横雨いぢとらふはと鞠う籠  
柱つけて解く石井の葉

麦飯いぢりそりと減る中象戲  
階子下りたぬ目めより増  
朝の月起て髪結い志生堂  
草丸のかるの物もたぬ  
蒸襪はら寸計の高足結  
は連新し一足茶宮の留守  
大屋及後堂坊の先ふ立子  
腰掛くみくみすあ者



江戸と出てのよしとくはく富士の山  
百世の師をみせし承りく  
山系をもとる流す梅の系  
伽羅も留損（出）と撞く  
うさめて月るとはほとき  
海老の系すめり 芝橋  
紅粉華は落さる為の多きこ  
佛のやうかく張いひは

腹形はさういふ物も皆書物  
紙子よひうら湖本膳所  
四十もろくこまみむ松木三  
母の空（出）成生涯のを  
除暖しる者の例の小商  
初午前母路次をよく成

ウ



第十

貞佐

黒木竈烟もよりの、落葉おし  
多々細水も石落る兵  
年々強ゆる出た唐紙袖招は  
神々嬉ひの大鼓あり  
重頑九ッ解る雨の月  
味主も勝るの葺稻



名も似れきをも 読者の柳み葉  
 望れ物持たす枝折戸  
 負さ子も其上 孕着ま若に  
 龍耳一口 躍り祈しくん  
 旅たよは只 殺生のむらさ  
 んとんの座に剛臆し  
 寺の月寐ころむも位牌蓮  
 三日晒されあさりのほのる

木兎み畳の鏡若つき  
 木賃泊れ 持たかきげ  
 弁まゝ 新も吉水 舞臺  
 蕨粉もよしの子つひ  
 雑買のすやせし 時を猿の舞  
 皺鏡み色女房 走る鹿  
 腰抱し雪の肌を打任せ  
 けも来は流る 輕十艘



責子蚊代責返とてと鏡付る  
 四履目まゝ 短衣代て  
 張弓の肩に按摩の志とて  
 表平しく寝宿つれ 保  
 さす傘をさし蹴つて 首 縊  
 跡をみれば 沙門跡も  
 菜畠よ 雲の狐の鳴き声  
 酒石吞りて 夢を愛さんる

ウ

世に中世の人の何れ買をり  
 伯父胡座りき 母 畏れ  
 朝衣を 眞心を披る門の家、雀  
 紙漿玉くく 神北角の  
 亮照の 鯛の味を 朝の汁  
 霞を 糸合もつるやき〜 喜



跋

すく〜晋子と交れ、義葉合の  
十次を仙風と信我有云あり  
亦今予より後め超波いれり  
しもの世あり給ふ〜義葉合と  
海舟林と云ふあり〜未〜の  
り〜記あり〜る〜る〜

葉の畔述



